

歴史の中の肥料—グアノ物語 4

京都大学名誉教授

高 橋 英 一

グアノの島が辿った運命

Guano Islands Actが制定された1856年からグアノ熱がさめてしまった1903年の間に、合衆国の企業家達は大洋上に点在する94の小島や珊瑚礁（内3分の1はカリブ海に、3分の2は太平洋上にある）に対する専有権を政府に請求した。

それらの中66は国務省によって一時的にせよ領有（appurtenance：主物である財産—ここではグアノ—に従属する権利、したがってグアノが採掘されなくなればその島に対する権利もなくなる）されたが、20余りについては実際にグアノは採掘されなかった。そして20世紀になるまでに大部分の所有権は放棄され、1903年に残っていたものは2ダースを割るに至った。

グアノは窒素とリン酸を供給する最初の無機質肥料として合衆国に登場し、1850年台から60年台にかけて大需要期を招来した。それは偶然ゴールドラッシュの時期と重なっていたため、グアノラッシュと呼ばれた。

しかし1888年に国内のフロリダでリン鉱石が発見されてからは、絶海の孤島でいろいろな障害を冒してまでグアノを採掘するメリットは次第にうすれていった（窒素質肥料としては南米チリからチリ硝石が入ってきた）。

しかしグアノの採掘が行われなくなってからも、合衆国はなかなか島を手放そうとしなかった。現在なを合衆国は九つのグアノの島を保有している。つぎに、カリブ海と太平洋のいくつかのグアノの島が辿った運命について紹介する。

カリブ海のグアノの島が辿った運命

Navassa 島

Navassa 島はHaitiの西方海上の、珊瑚礁に囲まれた広さ2平方マイルの小島である(図5)。Guano Island Actによって合衆国に領有されるようになった島の中で、もっとも長期間かつ大量に採掘が行われ、そして流血の暴動によって幕を閉じたグ

アノの島である。

この島は、1858年BaltimoreのCooper兄弟によって採掘が始められたが、1864年に他の資本と合併のNavassa Phosphate Co.が設立されてからは、大規模な採掘が行われるようになった。島はまとまった雨が少なく、石灰岩の上にわずかばかりの植生を支える薄い土壌があるだけで、人が住めるようなところではなかったが、会社は5万ドルの費用を投じて、採掘のためのいろいろな施設をつくった。そして1864年以降は常時180人の黒人（労働者）と30人の白人（職員と技術者）を雇用するに至った。

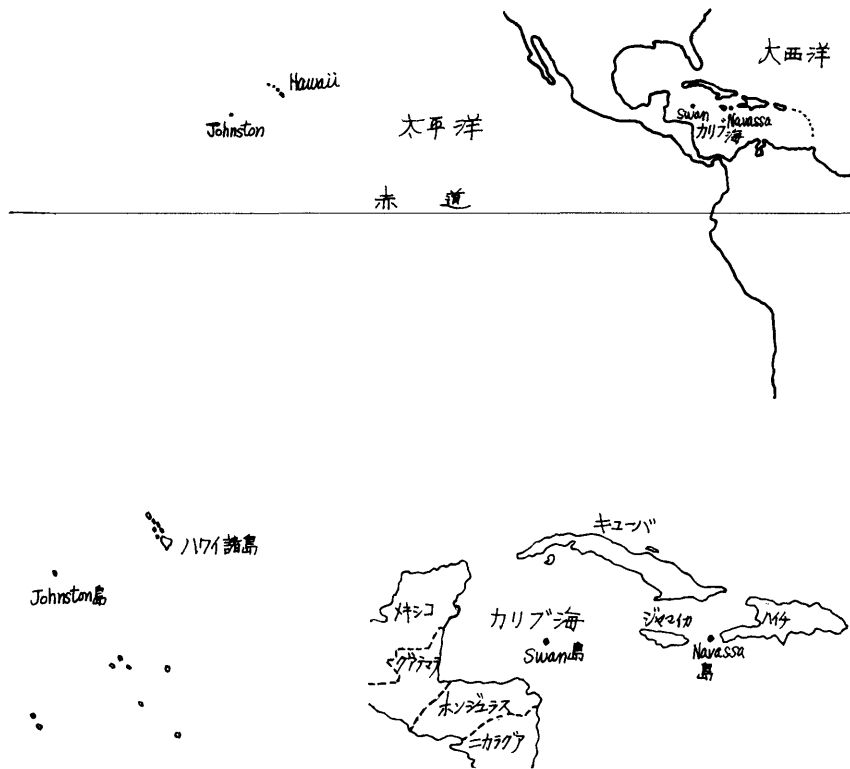
あとで分かったことだが島での白人による黒人労働者の酷使は甚だしく、両者の関係は年とともに険悪の度を増していった。そしてついに1889年9月14日早朝、暴動が起こった。これは夜になるまで続き、白人の中で最も憎まれていた5人が殺害された。

翌15日、その知らせはジャマイカのアメリカ領事のもとに届いた。近海にアメリカ軍艦がいなかったため、アメリカ領事の要請を受けたイギリス軍艦が、9月20日にNavassaに到着した。そして生き残っていた白人全員と白人に加担した黒人3人を保護し、ジャマイカのアメリカ領事のもとに送りどけ、領事は彼らをBaltimoreに送還した。

10月4日になってアメリカ北大西洋艦隊の司令官がNavassaに到着し、島に残されていた黒人の取調を行った。その結果暴動の首謀者と思われた黒人6人を逮捕し、それと証人として3人の黒人を艦に収容した。残りの124人の黒人は、折からグアノを運ぶために到着した2隻の帆船に乗せ、Baltimoreへ向かった。

11月19日、連邦大陪審がBaltimoreで開かれた。裁判は翌1890年2月15日結審し、20日、殺人罪として起訴された17人中3人に絞首刑、14人に10年から2年の懲役重労働が、そのほか暴動の罪で

図5. カリブ海と太平洋のグアノの島



23人に2年から6ヶ月の懲役が言い渡された。

絞首刑は翌月の3月28日に執行される予定であったが、被告弁護人側の最高裁への上告によって延期された。それはNavassa島の事件に対する合衆国の司法権行使の合憲性についてであったが、11月最高裁はこの上告を棄却した。

そこで弁護団はさらに刑の執行猶予を求める請願を大統領にした。また市民からも恩赦を求める署名が集められた。丁度そのころNavassa島から一通の手紙が、大統領Harrisonの下に届いた。それはWashington, D. C. から島にきたCarterという黒人が契約期間が過ぎても帰ることができず、奴隷のような状態に置かれているので救い出して欲しいというものであった。

大統領はNavassa島の実状を調べる必要があると考え、海軍長官にそれを命じた。1891年4月29日、調査隊は島に到着し、Carterの訴えの正しさを認めるとともに、労働者の管理は刑務所なみであり、このままでは暴動は何度も起こるであろうと報告した。

5月14日New York TimesはCarterの大統領宛の手紙を掲載し、「合衆国の旗の下における奴隷の

存在」(南北戦争の結果、1865年12月18日奴隷制廃止が宣言されたにもかかわらず)を報じた。

このような状況の変化の下、大統領はNavassa島の事件の責任は会社側にあると判断し、絞首刑を宣言された3人に恩赦を与え、終身刑に減刑した。

悪評を被ったNavassa Phosphate Co. はその後労働者を集めるのに苦労したが、グアノの採掘は米西戦争の勃発した1898年4月まで続いた。同年12月戦争は終わったが、会社はもはや採掘を再開しなかった。島のグアノの大部分は掘り尽くされた上、本土(フロリダ)産のリン鉱石との競

合が激しくなり、もはや採掘を続けるメリットがなくなったからである。1900年9月、会社の資産は競売に附され、1901年6月島から全員が退去するにおよんで、Navassaはグアノの島としての歴史を閉じた。そしてこれがグアノラッシュの終わりでもあった。

Guano Islands Actによれば、Navassa島に対する合衆国の主権もまた消滅したはずである。しかしその後も合衆国は、領有を主張するHaitiの度々の抗義を受け付けず、開通したパナマ運河(1914年8月)を航行する船舶のための巨大な燈台を島に建設した。そして今日なを領有権についてHaitiと論争中である。

Swan 諸島

Great SwanとLittle SwanからなるSwan諸島は、HondurasとCubaの中間のカリブ海に浮かぶ、熱帯植物の繁茂する面積併せて4平方マイルほどの小島である(図5)。

1857年Atlantic & Pacific Guano Co. がグアノ採掘権を獲得して以来、所有権は転々としながらも1904年までグアノの採掘は続けられた。その後採掘は行われなくなったが、それにもかかわらず合

衆国は半世紀以上にわたって島を利用し続けた。これはHondurasと島の領有権をめぐる紛争を引き起こした。

たとえばGreat Swanに気象庁は1914年に測候所を、海軍は1918年に貯炭所を、農務省は1946年に口蹄病予防のため家畜検疫所を設けたが、世界的に有名な事件に発展したのはCIAによる放送局の設置であった。

1960年、Gibraltar Steamship Corporationと名乗るCIAの隠れ蓑の会社が、中米のほぼ全域とCubaの西部をカバーできる大出力の放送施設を建てた。これに対してHondurasは直ちに島の主権に対する侵害であると抗議し、Castroは国連でヤンキーどもはHondurasの領土を奪い、そこでCuba侵攻のために兵士の訓練をしていると非難した。

一方CIAの放送局”Radio Swan”は、”Havana Rose”という名で知られるCubaからの亡命女性による放送(”Radio Free Cuba”)を開始した。彼女はCastroを独裁者と非難し、連日Castro打倒をあをった。

1961年4月17日早朝、Radio SwanはCubaの地下組織に、アメリカで訓練を受けた亡命者達がCuba解放のためPigs湾に侵攻したという暗号放送を行った。しかし上陸は失敗に終わり、作戦は直ちに中止されたことは放送しなかった。その後Radio SwanはRadio Americaと名を変え、1963年まで反Castro放送を続けた。

1969年大統領Nixonは、Swan諸島をめぐるHondurasとの争いに終止符をうつよう国務省に指示した。交渉の結果、合衆国はSwan諸島に対するHondurasの主権を認めること、島にある気象観測と遠距離通信の施設は両国が共同管理することで合意し、条約は1972年9月1日に発効した。

こうして合衆国はSwan諸島に対するHondurasの主権を認めたが、CIAの関与は1988年のはじめまで続いた。CIAはNicaraguaの”Contra”を支援するために物資や武器を本土からこの島へ運び、そこからNicaraguaへ空中投下していた。しかし議会在この「プロジェクト」の予算をカットしたため、対空ミサイルを含む何トンもの積み荷が島に置き去りにされた。その後どうなったかは不明のままである。

太平洋のグアノの島が辿った運命

Johnston 島

第一次世界大戦後合衆国は、太平洋における自国の権益を守る戦略を練りはじめた。それは力を増してきた日本が南太平洋の島嶼をドイツから獲得したため、極東の領土Philippinesとの連絡が脅かされる危険性を感じたからである。そこで浮かび上がったのが、Guano Islands Actによって太平洋上に保有していた島嶼の新しい利用である、その例の一つとしてJohnston 島の変遷を紹介する。

Johnston島は中部太平洋のホノルル南西1100キロメートルに位置する、珊瑚礁に囲まれた広さ40エーカーほどの島である(図5)。1858年、Pacific Guano Co.によってグアノの採掘がはじめられ、1892年頃まで続けられた。

1926年には農務省により野生動物保護区が設けられたが、1934年に管轄は海軍に移され、1939年ころから軍事基地化が始められた。環礁に囲まれた水面は埋め立てられ、滑走路や兵舎や地下の病院などの施設がつくられ、完成時には島は当初の4倍の160エーカーの広さになった。

1941年12月7日の日本軍の真珠湾攻撃の8日後、Johnston島は日本潜水艦の砲撃をうけた。戦争中、島は潜水艦と航空機の給油基地として重要な役割を果たし、終戦時には76機の陸上機、13機の水陸両用機と約1200の兵員を擁していた。

第2次大戦後島の戦略的価値は無くなったが、そのまま軍の保留地として留まった。1948年島の管理は海軍から空軍に移され、核実験の司令センターの役割を務めた。1970年陸軍は島の一部を借りて、沖縄にあった化学兵器をここに移した。一方このころ空軍は、ベトナムで使った枯れ葉剤Agent Orangeの貯蔵をはじめた。これは1977年に焼却されたという。

1973年、島の管理責任は空軍から国防省の核防衛局(Defense Nuclear Agency)に移管されて核兵器全般に関する業務を行うことになり、10億ドルの予算で核兵器のmonitorをする施設が建設された。

1983年、議会は島に化学兵器処理システムを設置することを認め、神経ガスを含む13,000トンの化学兵器が集められた。議会は1997年までに全化

学兵器の処分を命じ、38億ドルをかけて9つの焼却装置がつくられた。1990年にはヨーロッパの冷戦が終結したため、陸軍はサリンとVX神経ガスの入った10万発の砲弾を処分するために島に移送した。

太平洋のど真ん中に「世界中の有害物の処理センター」ができたことに、South Pacific Forum加盟国は大いに怒り合衆国に抗議した。これに対してBush大統領は、処理は安全に行われることを明言し、処分後は二度とこのような目的に島を使わないことを確約した。

そもそも合衆国の農業生産性を高める妙薬のグアノを供給する島であったものが、このように危険な核兵器や化学兵器の保管や処分を行うところになったことはまことに皮肉である。

グアノラッシュの歴史的意義

合衆国にもたらされ、またたくまにひろまった最初の「商品肥料」であったグアノは、農民に科学的な農業技術を学ばせ、生産性を上げ、収入を増

し、農民を政治的に目覚めさせもした。農民達はより安価にグアノを入手できるように政府に圧力を加えた。その結果1856年にGuano Islands Actが制定された。そして6年後の1862年には、農業を擁護する政府機関USDA（合衆国農務省）が創設された。

反面グアノラッシュを契機として私企業に対する公的援助は日常のこととなり、laissez faire（自由放任）が合衆国の経済政策であるとはいえなくなった。議会が、国に代わって市民に領土要求を行わせるような道（Guano Islands Act）を開いた例も世界の歴史にはない。グアノラッシュは「政府に助けられた個人主義の精神（a spirit of governmentally assisted individualism）」を育てたが、これらのことは、これまで合衆国の歴史の中で見落されていた。ここに合衆国に起こったグアノラッシュのもつ歴史的意義がある。